読んでみよう 解いてみよう さん太のワークシート

ニンニクの特産化に励む井原市の住民が、栽培から販売までを担う組織を立ち上げました。記事を読んで質問に答えましょう。

低学年もチャレンジ！

Q1 メンバーは65歳以上の高齢者が中心となっています。次の世代に伝えるためにはどんなことが必要になるでしょうか。アイデアや意見を出してみよう。

Q2 ニンニク栽培のメリットは何だろう。記事の中から二つ答えてみて。

大江小児童と一緒に皮むき作業に取り組む会員＝6月25日、にんにく直売所

ニンニク特産化加速

井原

大江町地区住民が新組織

ニンニクの特産化に励む井原市大江町地区の住民が、栽培から販売までを担う「いきいき菜園の会」を立ち上げた。これまではまちづくり協議会が中心となって手がけてきたが、スタートから10年の節目を迎える中、新たな組織で一層の活動充実を目指す。会員は「ニンニクといえば大江、と広く知ってもらえるようにしたい」と張り切っている。（岩谷圭）

栽培から販売まで 会員増やＰＲに力

菜園の会は、65歳以上の高齢者を中心に住民41人が参加し、6月に発足した。希望者に種ニンニクや肥料を提供して栽培・収穫後に地区の「にんにく直売所」に卸してもらうほか、直売所を拠点に乾燥ニンニクの皮むき作業などを行う。販売収益は会の活動に役立てるとともに会員にも還元する。

アピールに向け、市内外の子どもたちを招いた体験活動も計画。6月下旬には地元・大江小の3年生8人が直売所を訪れ、猪木英夫副会長(74)らから育て方を教わったり、皮むき作業で交流したりした。

ニンニクの栽培は、田んぼでコメとの二毛作ができ、面積当たりの収益が比較的高いといった利点に着目し、大江まちづくり協議会が2015年に始めた。住民から借り受ける農地を拡大しながら現在は50アールで育て、当初1・5トンだった収量を約4トンにまで増やしている。

今後は会員を増員しながら外部にも栽培協力者を求める考えで、寺岡勝久会長(77)は「高齢者の生きがいづくりや居場所づくりにもつなげたい」としている。

2024年7月10日付、備中面

Q3 記事に書かれている内容を読んで、次の三つから正しいものを一つ選んで答えてみましょう。

①新たな組織の名前は「いきいきニンニクの会」だ
②栽培希望者には肥料などを買うお金を渡している
③現在は50アールで育て、収量を約4トンにまで増やしている

過去の問題はこちらから▶▶

◇「さん太のワークシート」は自由にダウンロードして、学校や家庭での学習に活用してください。